

モチベーション研究所年次報告書『モチベーション研究』第7号をお届けします。今号は原著論文4本、研究所フォーラム抄録2本を掲載することができました。ご投稿いただいた皆様、ならびにフォーラムでご講演いただきました大庭さよ先生（医療法人社団広富会神田東クリニック）、申紅仙先生（常盤大学）に、あらためて御礼申し上げます。

学びへの意欲を高めるために

ご存じの方も多いかと思いますが、OECD加盟国が3年に1度、15歳の生徒を対象に、数学的リテラシー、読解力、科学的リテラシーの3つの分野について学習到達度に関する調査を実施しています。PISA (Programme for International Student Assessment) と呼ばれる調査で、2000年から始まり、直近では2015年に実施されました。

この調査には日本も加わっており、2015年の結果では、参加72カ国・地域の中で、科学的リテラシーは第2位、読解力は第8位、数学的リテラシーは第5位と、高い能力を持っていることが示されています。

このように科学的なリテラシーは高いにもかかわらず、科学に対する態度については、前回調査時より改善は見られるもののOECD平均値に比べるとかなり低くなっています。どうも日本の子どもたちは、能力は高いけれど学習意欲や自信が低い傾向にあるようです。

ここからは、意欲（モチベーション）をどのように高めていけばよいのかという問題が出てきます。これは多くの小・中学校あるいは高校などが抱える大きな課題の一つとなっています。当研究所でも、2年前から墨田区教育委員会すみだ教育研究所との連携事

業で、墨田区児童生徒の学習意欲向上を旨とする研究を行っており、現在は学校現場での介入研究の段階に進んでいます。いずれ成果をご報告する予定でいます。

またこの問題は、現在の大学教育の中でも少なからず共通する面があるように思います。最近の調査では、日本の大学生が自宅学習に割く時間は、海外諸国の大学生に比べて圧倒的に少ないというデータも出ています。多くの大学が、授業中の学生の居眠りや私語に悩まされています。「馬を水辺に連れて行くことはできても、馬に水を飲ませることはできない」という諺がありますが、環境を整えても本人がその気にならねば結果にはつながらないということでしょうか。

それでは困ります。どうすれば学生たちの学びへのモチベーションを高めることができるか、アクティブ・ラーニングや問題解決型の学びなど、各大学がそれぞれに工夫を凝らして取り組んでいます。

先に紹介した墨田区教育委員会との連携研究でも、児童生徒の自己受容感、自己肯定感、自己効力感といった要因に着目し、内発的モチベーションの促進に向けた取り組みを実践しているところです。当研究所では、こうした取り組みのみならず、授業研修会におけるアドバイスや保護者向け講座なども開催し、地域や社会への貢献に努めています。研究所フォーラムもその一環です。

「モチベーション」は、いまあちこちで普通に耳にする語になりました。それだけモチベーションへの関心が浸透してきているといえます。当研究所が果たす役割も今後ますます大きくなるものと思います。引き続き皆様のご支援を賜ることができれば幸いです。